

ひびきあい

学校だより3月号

令和5年2月28日

横浜市立新田小学校

うれしかったこと

「村岡先生、お久しぶりです。」

校長 村岡 靖

先週、新田小の校長室を訪ねてくれたのは、20年前の教え子でした。20年前、活発で正義感の強い元気いっぱいの1年生だった女の子が、清楚で凛とした大人になって、私の前にいました。私が新田小学校に勤務していると知って、母親と一緒に尋ねてきてくれたのです。会ったとたん、女の子はぼろぼろときれいな涙をこぼして、私もつられて泣きそうになりました。その後、短い時間でしたが、3人で懐かしい話をしました。驚いたことに当時、私が出していた学級通信をまだ大切に持っていていました。また私も忘れてしまったようなエピソードを覚えていました。人生のご褒美みたいな時間でした。それとともに20年前の事をここまで覚えてくれていることに、教師のかける言葉の重みを改めて感じました。「あの時の私は、怒ってばかりじゃなかったかな。きちんと教えられていたのかな。」教師のもつ責任の大きさを感じたのです。

朝、学校に来るときに来年入学する女の子と道ですれ違います。女の子はお母さんと一緒に登園するのでしょうか。いつも可愛らしい笑顔で大きく手を振ってくれます。「ようこそ。新田小へ。4月から一緒に学びましょう。」手を振り返しながら思います。

2015年にオックスフォード大学と野村総研が「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能になる」と発表しました。無くなってしまう仕事があれば、コンピュータでは替えがきかない仕事もあります。看護師や医師と同様に教師もICTで代替はできないそうです。一人一人の「学びたいと思う気持ち」を湧きあがらせることはICTでは難しい。教師の仕事の大きな一つは、子どもの存在を認め、受け入れ、学ぶ意欲を喚起することだと思います。全ての子どもに対して「ようこそ。君は大切な人です。ここで一緒に学びましょう。学ぶことで新しい世界が広がるよ。」そう告げることだと思います。

本校に車いすで登校する子どもがいます。毎朝、お母さんが急な坂道を押してきます。子どもが大きくなって、坂道ではまっすぐ押せずS字に曲がりながら、少しずつ上ります。自動車での登校もいいですよと話しましたが、お母さんは毎日車いすを押して坂道を上がります。大切な命の重さなのです。そのお母さんがある日、とてもうれしそうに話してくれました。「校長先生、今日、1年生が、何かできることはないですか、と声をかけてくれたんです。」私もうれしくなり、朝会で話しました。一週間後にまたお母さんがうれしそうに「声をかけてくれる子が増えてきました。」とお話してくれました。思いやりが広がっていきました。

朝会で話したときには『バスが来ましたよ』と言う絵本も読みました。視覚障害の方が通勤のため苦労してバスに乗ろうとしたときに、小学生が「バスが来ましたよ」と声をかけて助けてくれたのです。女の子はその後、毎日声をかけてくれるようになりました。女の子が小学校を卒業した後も、その活動は妹や友だちに引き継がれ、その方の退職まで続きました。これは実話だそうです。思いやりのリレーですね。

今後も職員一同力を合わせて、子どもを大切にできる学校を創っていきたいと思っています。今年1年間、ご理解とご協力、本当にありがとうございました。